
遠藤周作『沈黙』の研究

——日本の精神風土の象徴:井上筑後守について——

陳 華

はじめに

『沈黙』の主要な登場人物は、主人公ロドリゴ、フェレイラ、弱者の代表キチジロー及び禁教政策実務者の代表井上筑後守である。その中において、遠藤は『沈黙』の書き下ろし版の「あとがき」¹に、「岡田三右衛門ことロドリゴ」のモデルは本名「ジュゼッペ・キャラ」であり、棄教後「岡本三右衛門」と名乗ったということを記している。実際、フェレイラ、井上筑後守にも史上において実在のモデルがある²。本稿では、これまで注目されていない井上筑後守政重を取り上げる。彼はロドリゴに対峙する日本の精神風土の象徴的人物と見てとれる。島原乱後の禁教政策の史実を、遠藤がどう把握し、人物造型を行っていったか、これら登場人物のモデル像と作中人物像について考察してみよう。

1. 井上筑後守について

史実上の井上筑後守については、まとまった論文も人物伝も見当たらない。わずかに『寛政重修諸家譜』³をもとにした『国史大辞典』⁴、『日本歴史大辞典』⁵などの記述があるだけである。遠藤は『沈黙』の中で、日本の宗教観を体現する人物として井上筑後守を造型した。注目すべき着眼点だと思う。私はこれらの史料を調べ、さらに『平戸オランダ商館の日記』⁶、『長崎オランダ商館の日記』⁷の記事に基づき、史実による井上の略年譜を作ってみた。それは下記の通りである。

略年譜

- ・天正十三年（1585）遠江国に生まれる。清兵衛政重と称す。井上清秀の四男。母は側室、永田氏の娘※
- ・慶長十三年（1608）より、徳川秀忠に仕えて御書院番士となり、廩米二百俵を賜う。※
- ・元和元年（1615）大坂の陣に参加。※
- ・元和二年（1617）九月十五日 徳川家光に仕える。※
- ・元和四年（1619）采地五百石を賜う。※
- ・元和九年（1624）将軍が八月洛にのぼらせたまうに供奉し、また五百石を賜う。※
- ・寛永二年（1625）御目付けとなり、千石を加増される。※

- ・寛永四年（1627）十二月二十九日 従五位下筑後守に叙任される。※
 - ・寛永九年（1632）十月三日 二千石を加賜され、
十二月十七日 大目付に進む。※
 - ・寛永十年（1633）五月十八日 近江国水口への御遣いを承る。※
 - ・寛永十一年（1634）将軍が洛にのぼらせたまうに従い、閏七月八日 若狭国に赴く。※
 - ・寛永十三年（1636）十一月十日 朝鮮の信使の来朝に際し、岡崎に赴く。※
 - ・寛永十五年（1638）正月三日 肥前国島原の乱により、上使として、島原に赴く。松平伊豆守の相談役となった。また同年七月の松倉長門守譴責賜死の時には検使役になるなど、乱の処理に関して重要な役割を果たした。※
- 長崎奉行、これより以後半数が長崎在勤、他は江戸在府とし、一年で相互に交代することが定まる。
- ・寛永十七年（1640）六月十二日 六千石の新恩があり、すべて一万石を得る。この年、しばしば西国に往還し、また長崎に赴き、異国の商船及び耶蘇禁制などのことを裁許する。※
九月（西暦11月）平戸オランダ商館の倉庫にキリスト紀元の年号が刻してあるのを理由に、同倉庫を取り壊させるのを命じる。
(『平戸オランダ商館の日記』フランソワ・カロンの日記)
- 五ヶ所商人、平戸のオランダ商館の長崎移転を幕府に訴願。
- ・寛永十八年（1641）五月二十三日（西暦6月下旬）長崎に赴く。これより後もしばしば長崎に至る。※
平戸のオランダ商館が長崎出島に移転され、オランダ貿易が長崎に限られる。井上が移転の実現に決定的な役割を果たした。
(『平戸オランダ商館の日記』マクシミリアン・ルメールの日記)
 - ・寛永十九年（1642）海道の諸民愁苦のことを処理する。※
同年、オランダはポルトガルとの間に10年間の休戦条約を結ぶ。欧州諸国の外交関係などについてオランダ商館長エルセラックに尋ねる。
(『長崎オランダ商館の日記』ヤン・ファン・エルセラックの日記)
 - ・寛永二十年（1643）五月二十三日 三千石の地を加封される。※
 - ・承応二年（1653）日光山に赴き、将軍家光の三回忌に参列。※
 - ・万治元年（1658）閏十二月八日 職を辞める。※
 - ・万治三年（1660）七月九日 引退する。※
井上筑後守は万治三年（1660）に引退するまで、宗門改役として禁教政策の最高指揮者となり、邪宗門絶滅という幕藩制国家確立期の思想政策を推進した。
 - ・寛文元年（1661）二月二十七日 没。年七十七。法号幽山日性高院。※
(特に※印を記している箇所の典拠は『寛政重修諸家譜』巻第二百四十三による。)

なお、2006年11月5日（日）の「『ローマを夢みた美少年 天正遣欧使節と天草四郎』展の長崎歴史文化博物館・開館一周年記念シンポジウム」において、ライデン大学教授レオナルド・ブリュッセイの「大目付、井上筑後守政重とオランダとの関係について」と題する講演があった。内容はオランダと日本との経済関係、情報活動などについてであったが、最近、この人物への関心が高まっている。

2. 井上筑後守と島原の乱の平定

上記の資・史料の記載に表れる井上筑後守と『沈黙』における同人物の作中像と比べ、考察してみよう。

小説『沈黙』では島原の乱が収まった後を時代背景として物語が展開される。作中人物井上筑後守は「島原の内乱以後、基督教弾圧の事実上の指導者」となった。

島原の乱（一六三七年十月——一六三八年二月）は、肥前島原、肥後天草地方に起こったキリシタンを中心とする農民一揆である。藩主松倉重政（島原）、寺沢広高（天草）の禁教・重税・厳罰に反して、天草四郎時貞を首領に約3万8000人の農民が挙兵した。幕府は初め板倉重昌を派遣し、九州諸藩の藩兵を使って、原城を攻撃したが、失敗した。寛永十五年（1638）元旦総攻撃するが、板倉は戦死し、幕府は新たに老中松平信綱を派遣した。年譜でわかるように、井上政重が同年正月三日島原へ赴き、松平伊豆守の相談役となった。二月二十七日に農民一揆が鎮圧されると、三月十三日に將軍徳川家光に結末を報告した。その時、彼は日本全国からキリシタンを根絶させるよう進言している。松平信綱はオランダ船に砲撃を要請し、兵糧攻めて同年二月落城させ参加者を皆殺しにした。幕府は島原の乱の後、キリシタンを根絶やしにするため、全力をそそぐことになった。そこで、具体的なその政策の実施を一任された中心人物が、大目付井上筑後守政重であった。これは『契利斯督記』⁸にこう記されている。

大猷院様御代、島原一揆落城以後、從仙台伴天連寿庵、マルチイニヨ市左衛門、キベキペイトロ召捕参候、評定場江四度出申候ヘドモ御穿鑿キワマリ不申、其後讃岐守下屋敷江被為成、三人ノ伴天連被召出、沢庵柳生但馬守其外寄合、宗門ノ教御尋、二三日過、中根峯岐守為上使筑後守被仰付、右三人ノ者共評定所江出シ不申、筑後守一人ニテ穿鑿仕候由。

つまり全国のキリシタン取り扱いは、老中から大目付に任せられたわけである。

井上政重は島原の乱の平定と、切支丹の徹底的とも見えた根絶、処分の手柄によって、禄高四千石の目付け役から一躍一万三千石の宗門奉行に取り立てられた。その飛躍的栄達に、彼がいかに將軍家光の恩寵を浴びたのかが窺われる。

『沈黙』の主人公ロドリゴは、「一六三八（筆者注：寛永十三）年三月二十五日」（『沈黙』第I章 以下ローマ数字はその章を表す）に日本へ旅立ち、同年の五月、トモギ村に上陸した。言うまでもなく、主人公は師フェレイラが転んだという風聞の真偽を確かめるために、ちょうど島原の乱が収まった直後日本に潜入したのである。

3. 井上筑後守とキリシタン

① 井上筑後守はもとキリシタンなのか。

小説『沈黙』において、井上筑後守は「三十年前、蒲生家の臣であった時、余もパードレたちに道を乞うたことがあった」(Ⅶ)とロドリゴに明かした。

「蒲生家の臣」であり、もとはキリシタンであった井上筑後守は史実上いったい洗礼をうけたのかどうかについて史料を調べてみた。ミカエル・ジュタイシェン⁹⁾によれば、「蒲生の家来で棄教したらしい井上セイペイ(筑後守政重のこと)は、後に(略)切支丹奉行となった」と述べるように、井上政重は切支丹大名蒲生氏郷の家臣という説がある。

蒲生氏郷(1556-1595)は安土桃山時代の武将である。天正十三年(1585)大坂で洗礼を受けて、レオンと称した。文禄四年(1595)、四十歳で毒殺されて亡くなってしまった¹⁰⁾。蒲生家の家臣は多くキリシタンである。蒲生氏郷が亡くなった数年の間、「キリシタンであった蒲生の重臣たちは宗教の味方となっていた」¹¹⁾。

井上政重は井上清秀の四男である。井上清秀は織田信長の家臣佐久間信盛の与力となったが、天正四年(1576)五月七日織田信長が摂津国天王寺に一向宗徒を攻めた時、徳川家康が織田信長に加勢を願ったため、井上清秀は遠江国馬伏塚城主である大須賀康高に仕えるようになった。慶長九年(1601)九月十四日に七十二歳で亡くなった。¹²⁾そこで井上政重は江戸に出て、「慶長十三年より台徳院殿(秀忠)に使え奉り、(略)元和二年大猷院殿(家光)に附属せられ、(略)寛永九(1632)年十二月、大目付にすすむ」というような立身出世の道を歩んだ。

上述のように、井上政重が蒲生の家来であった一説もあるが、確証は得られない。

松田毅一博士は、その著『南蛮のパテレン——東西交渉史の問題をさぐる』¹³⁾に、「一六四〇年に、四十歳代に切支丹宗を棄てた井上筑後守を初代の改役に任じて、徹底的に切支丹宗門を根絶せしめることにした」と述べているが、「四十歳代に切支丹宗を棄てた」という松田説については疑問が残る。もし棄教したのが四十歳代とすれば、一六二五年以降のことになるのであるが、年譜でわかるように、その時期はちょうど井上政重の仕官の様子を見ると生涯の昇進時期にあたる。であるから、もし信仰があって棄教したとすれば、それは恐らくもっと前のことであろう。

② 井上筑後守はどのように信徒を棄教させたのか。

『沈黙』では井上筑後守がキリスト教に経験があった人物として描かれた。「基督教徒にとって困った」この人物は「蛇のような狡猾さで、巧みな方法を駆使し」、「信徒たちを、次々と棄教させている」とする。その「巧みな方法」とはいったいどんな方法であろうか。文献による記載は次のようである。

拷問ヲ頼ニイタシ好ム事悪ク候、奉行骨ヲ折候トモ、切々穿鑿イタシ、細ニ口書ヲ申付、色々思案イタシ、手ヲ廻シサグリ尋ルコト可然由、或ハ宗門ヲカクシ、又ハ類門白状イタサザル時、センタツキタルトキ拷問仕ベキ事¹⁴⁾

とあるように、実際の井上政重はキリシタンに対して、それまでの野蛮なやり口を控え、懐柔策をとることにした。詳しく言えば、捕らえた伴天連たちをなるべく殺さずに尋問して、耶蘇教の本旨と、外国の事情を問い調べる方法を使った。いかなる説得も伴天連の信仰心を揺るがすことができない場合、拷問にかけるのである。

筑後守が後任者北条安房に与えた口述書、あるいはその記録として著名な『契利斯督記』には、「筑後守伴天連江不審ヲ掛申詰コロバセ申候論議」の項がある。その中には、こんなことが書かれている。「デウス天地ノ作者ナラバ、何カヤウニ力ニ不及国ヲ作りヲキタルヤ」（もしデウスが天地の作者ならば、なぜこの国を作りながら、かくも力が及ばないのか）。デウスは人祖としてアダムとエヴァを作り世界の極楽に住んでいたが、「イマシメノ木ノ実ヲ夫婦ノモノ食シ候故、悪世界へ追出サレ候、其タタリニテ末世ノ人間辛苦ヲ致候由」、「只今ノ人間現在ニテタルシミ未来ハインヘルノヘヲツルコト、皆デウスノシワザナリ、ヲノレガ作りタル世界ノ人間ヲ惡道江落シ、又其人間ヲタスクベキト法ヲ弘ルト云儀、首尾不合ナラズヤ」。また、「形ハ人間、行体ハ畜生ナル国、アヒリカノ内何ト云所ノ人間ハ恥ヲシラズ、黒ボウニテ牛ノ糞ヲ糞身ニヌリ、穴ヲ掘テ家トシ、人ヲ食、加様ノ国ヲ作ルデウスハ大悪人ノ源、世界ノ人間ノ惡成主也」と。

これは小説の山場の一つといえるロドリゴと通辞の論争のなかにも窺うことができる。たとえば、その中の一條「デウス天地ノ作者ナラバ、何カヤウニ力ニ不及国ヲ作りヲキタルヤ」は、通辞の設問「デウスにまこと慈悲の心があらば、なにゆえ天国に行く道に至るまで、様々の苦しみやむつかしき事を与えたとおもわるるか」に表現している。そして、デウスは人祖としてアダムとエヴァを作り世界の極楽に住んでいたが、「イマシメノ木ノ実ヲ夫婦ノモノ食シ候故、悪世界へ追出サレ候、其タタリニテ末世ノ人間辛苦ヲ致候由」、「只今ノ人間現在ニテタルシミ未来ハインヘルノヘヲツルコト、皆デウスノシワザナリ、ヲノレガ作りタル世界ノ人間ヲ惡道江落シ、又其人間ヲタスクベキト法ヲ弘ルト云儀、首尾不合ナラズヤ」という一條は、通辞の「デウスこそ大慈大悲の源、すべての善と徳の源と申し」、「悪人ともを創られた。(略)悪もデウスのなせる業じゃ」という詰問に合っている。

井上政重は切支丹について多少理解がある。特に、鳥原の乱にあたってみて、何の罪もない、むしろ善良な男女、子供までをただキリスト教を信じるということだけで大量処刑することは、その残酷さを目撃する大衆にとって、その宗旨に対する同情と畏敬の念を掻き立たせ、むしろ逆効果になり、一般の反感を喚起することを考えたのだろう。そこで、もし宣教師を転ばせることができれば、もはやキリスト教の「根も絶たれ」たことに等しいと考える。

また、H・チースリックは著書『キリシタン時代の日本人司祭』¹⁵に、「井上筑後守の方針は一言でいうならば、殉教者ではなくは背教者をつくれ、ということであった」と記す。「そのため彼もまず“洗脳”に手を尽くして、彼らを説得しようと努めた」というのも同様の方針を指摘しているのである。

井上はバテレンを棄教させた経験が豊富である。寛永十六年（1639）三月頃、奥州仙台領から三人のイエズス会宣教師が江戸に送られてきた。そして評定所において四回取り調べたが、のち「筑後守所ニテ十日、切支丹ノ法穿サクイタシ、十日過、三人ノ伴天連籠屋ニテ筑後守家頼ヲ遣

シ拷問申付、コンバニヤ、寿庵、マルチイニヨ市左衛門、コロバセ念仏ヲ申サセ候ヨシ、其後筑後守所江召寄、一兩年指置候所ニ、二人トモニ病死仕候由、キベキベイトロハコロビ不申候、ツルシコロサレ候、是ハ其時分マデバ不功者ニテ、同宿二人キベトーツ穴ニツルシ申候故、同宿ドモ勤、キベヲコロシ申候由」と『契利斯督記』に記されている。拷問はむしろ「最後の手段」といったほうがいいであろう。その「最後の手段」として有名なのは「穴吊り」のことである。汚れ物を入れた穴の中に、体を縛って逆さに入れる。血が頭に逆流して、そうして三日も四日も経つ中には下腹の臓腑までがすっかり胸に詰まってくる酷刑である。フェレイラは穴吊りの刑を受けた五時間後、棄教したのである。

4. 井上筑後守と切支丹屋敷

井上は特に転びバテレンに対しては女蔵を造り一緒に住まわせるため、小日向の屋敷地に宣教師や伝道士、そして格式のあるキリシタンを収容した。この切支丹屋敷は今の東京都小日向の切支丹坂の近くにあった別称山屋敷のことである。その傍の立て札には次のように説明してある。

江戸幕府はキリスト教を禁止し、井上筑後守政重を初代の宗門改役に任じ、キリスト教徒を厳しく取締った。

この付近は宗門改役を勤めていた井上政重の下屋敷であったが、正保三年（1646）屋敷内に牢屋を建て、転びバテレンを収容し、宗門改めの情報集めに用いた。主な入牢者にイタリアの宣教師ヨセフ・キアラ、シドッチがいた。

享保九年（1724）火災により焼失し、以後再建されぬまま寛政四年（1792）に廃止された。

昭和五十九年十二月二十八日

東京都教育委員会¹⁶

立て札に記されているように、このキリシタン屋敷に住んでいた有名人は、「ヨセフ・キアラ」と「ヨハン・シドッチ」である。ヨセフ・キアラ神父（岡本三右衛門）は、初代宗門改役の井上時代から8代目の林信濃守忠隆時代までの約44年間ずっと小日向の屋敷に住んでいた。宝永五年（1708）屋久島に上陸した宣教師ヨハン・シドッチもここに囚われていた。牢獄中、新井白石に尋問され、キリスト教や西洋事情を説明した。この知識から新井白石は『西洋紀聞』、『采覧異言』を著述し、鎖国下の日本学者の視野を開いた。

『沈黙』では、捕縛されたロドリゴは、宣教師たちの取調べに辣腕を振るうといわれている「イノウエ」さまが「即座に刑罰を与えられる」というイメージを心の中に深く刻んだが、牢屋で初めて対面した時、ロドリゴの眼に映るのは「珍しい玩具をあたえられた幼児のように好奇心とやさしい笑いを浮かべ」、「ものわかり良さそうな温和な」老人だった。この印象は、二度目に会った時でも変わらない。にもかかわらず、この人物が表に出さない厳しい一面も『沈黙』に多く表れている。

たとえば、井上筑後守と論争するロドリゴの次のような心理描写である。「片眼の男の死体が

光の白く照りつける地面にうつ伏せに倒れ、番人が片足を無造作に穴まで引きずっていった。その穴まで血潮が、まるで一刷毛、線を描いたように地面に長く続いていた。あの処刑を命じたのはこの柔和な顔をした男だとは司祭にはどうしても思われない」(Ⅶ章)。一回目の論争で、ロドリゴの反発に「老人は幾度もうなずきながら」、「まるで司祭の味方ようだった」が、「しきりに手をもんでいる」。この一見無意味そうな動作は、小説に何箇所も描かれている。「老人らしく手をこすりあわす動作」は恐らく井上筑後守の心理活動を暗示しているであろう。彼がしきりに考えているのはどういうふうに宣教師を説得し、拷問をかけずに転ばせる方法を思案している動作であろうと、私は考える。

5. 井上筑後守とオランダ商人

史実上の井上政重はどんな人物であろうか。寛永十七年(1640)から慶安三年(1650)にかけて彼は初代宗門改めの責任者として活躍していた。そのほか、オランダ商館とも深い関わりがある。これは、『平戸オランダ商館の日記』、『長崎オランダ商館の日記』の行間から窺える。

「井上筑後殿、城の最も重要な司令官、(略)必要な場合は皇帝に報告するため、閣老その他すべての会合に自由に出席する権限を持っている」¹⁷とあるように、井上筑後守は徳川家光に特別なアクセスを持っていた強力な人物であることが想像できる。

彼はオランダ商人にとって幕府との対話に欠かせない、仲介者のような存在である。『平戸オランダ商館の日記』、『長崎オランダ商館の日記』を見ていくと、筑後守は実際にすべてのオランダ人との対応を任せられ、彼らとの交渉を執り行なっている。江戸城内でどのようにオランダ人が振舞ってよいかアドバイスしたり、オランダ人が献上しなければならない貢ぎ物を吟味したり、参勤交代や江戸参府の旅において乗物を使うことなどある一定の特権をオランダ人に保証したりなどである。

寛永十七年(1640)10月30日(九月十六日)、井上筑後守は150人の兵卒を従い長崎に来た。そして長崎奉行拓植平右衛門正時を伴い、11月9日(九月二十六日)平戸城において当時オランダ商館長であったフランソワ・カロンを招き、オランダ商館を壊すよう命じた。その記事はカロンの11月9日付の日記に次のように記されている。(※注記 『平戸オランダ商館の日記』等の日付は西暦を出し、括弧内に和暦を示した。以下同じ)

朝八時頃、上記の使節(筆者注：井上筑後守)と奉行は、随員を大勢連れて商館を見に来た。商品がいっぱい入っている倉庫と住居全体を細大漏らさず、どこかにキリシタンの飾りが見つかからないかと、下から上まで詳しく調べた。しかし、何も見つからないので、しばらく話をして、平戸の侯の家に帰った。そこで使節は我々を呼び、次のように言った。

「皇帝は貴下がポルトガル人と同様キリシタンである、との確かな報告を受けている。貴下は日曜を守り、キリスト生誕の年を我々の国の一般の人々から見る貴下の家の前の破風に書いている。十戒、主の祈り、洗礼、晩餐礼、旧新約聖書、モーゼ、予言者、使徒などを信じている。(中略) 貴下がキリシタンであることは以前から知っていたが、別のキリシタンと

考えていた。そこで皇帝は私に上記の年号に入っている貴下の住居を一つも例外なしに取り壊させるよう、命令した。これは最近建てられた北側からはじめ、次第に全部を取り壊すように。(後略)」¹⁸

つまり、平戸に石造倉庫と立派な住宅は日本の習慣に反したもので、特にAnno Domini 1638 (西暦1638)と彫られた破風が日本の元号を使っていないことや、第七日を公に祝すなどのことに将軍が立腹したためである。

平戸オランダ商館は慶長十四年(1609)に平戸に設置して以来、貿易拡大に従い、以後(1612、1616、1618、1623、1637、1639年)順次施設の拡大整備が行われた。特に寛永十四年(1637)と同十六年(1639)に建設された倉庫は規模が大きく、充実した貿易の象徴であった。しかし、商館長カロンは直ちに将軍の命令に従い、11月10日(九月二十七日)から僅か一週間のうち、倉庫と住居を全部取り壊した。11月10日カロンは平戸侯の提案に従って、「少しも不満を示さずに」井上筑後守を訪ねた。その日の様子はこう記されている。

彼(筆者注：井上筑後守)は我々のために行わねばならなかった、すべての困難について嘆き、「皇帝の意にかなうには、すべてを辛抱しなければならない」と言った。(中略)このことは私の任務であり、(中略)皇帝の希望は常に満たさねばならない。¹⁹

つまり、井上筑後守は、オランダ商人に皇帝の命令に全面的に服従すれば、数年の間日本に来ることができると励ました。そして、自分の立場を明かし、オランダ商人に対していくらかの同情心を抱いていたことが推測できる。寛永十八年(1641)、オランダ商館は将軍の命令に従い、平戸から長崎の出島に移転させられた。オランダ人が自分たちの「保護者」とであると呼ぶべき男が、平戸の商館を壊すように命令し、また長崎の出島からオランダ人が出ないように監視していたのは皮肉なことである。しかし、これは当時の事実である。

上記の文献資料から、史実上の井上筑後守は、将軍の命令をしっかりと執行する人物である。とともに、外国人と積極的に私的な面でも付き合うし、人間性を失わない人物でもある。

『沈黙』の中では次のように描かれる。ロドリゴははじめて井上筑後守と対面した時、簡単な人定の尋問の後、最初に聞かされたのは「パードレが万里の外に使いとして、陰阻難難をへてここに来られる志の堅さに我々とていたく心を動かされる。さぞ、今日まで辛かったことであろうな」という、優しさがこもった言葉だった。「その優しさが司祭の胸に痛いほど染みた」。続いて、「我々とて、それを知る故に、職務とは申せこうして取り調べるのは心苦しい」という。それに対してロドリゴは「思いがけぬ役人の言葉に、張り詰めていたところが、突然崩れる。もし自分たちが国や政治という制約さえ持っていないならば手を握りあって話しあえるのではないか」と遂に思ってしまったのである。

この場面における作中人物の井上筑後守は、『平戸オランダ商館の日記』、『長崎オランダ商館の日記』に記されている史実上の同人物とほぼ合っていることが窺える。

司祭としての栄光、基督信者としてのプライドが日本という国によって崩され、遂に神の存在

に疑惑を抱くようになったロドリゴにとって、役人の言葉は、敵の策略と覚悟しているにもかかわらず、やはり理解の気持ちが溢れる言葉であり、異国人のロドリゴを慰めた。ここで、ロドリゴ自身もあることに気付く。つまり「国籍や政治という制約」がなければ、お互いに友達になれると考えた。この制約はむしろ東洋文化と西洋文化の溝を指しているのではないか。この溝が簡単に埋められないから、禁教下の日本における布教活動は困難極まりないことになったわけを知る。異文化間に横わたる深い溝のことも、恐らく遠藤が伝えたかったことであろう。

史実上、井上筑後守は常にオランダ商人と交流を続けた。当時オランダ商館の代表は毎年冬に将軍を表敬訪問しなければならなかった。夏の間、日本の南部でキリスト教徒を取締り迫害していたので、この間もオランダ人との交流は長崎で続いた。特に江戸滞在中にオランダ人が老中や、時には将軍との対面する前に、井上はオランダ人から多くの事柄を聴きだしている。オランダのカピタンを幕府に紹介するのは井上の役目だったが、海外の政治の動きについてオランダ人に情報の収集を義務付けた。つまり「風説書」の提出である。これはオランダ人が日本渡航を許可されるための一つ重要な条件とされている。1643（寛永二十）年12月21日付の「ヤン・ファン・エルセラック日記」には、幕府から与えられた情報収集に関する覚書が記されている。

ポルトガル人並にイスパニア人は、日本に来て常にキリスト教を広め、諸人の教化に努力したゆえ、皇帝は非常に両国人を憎まれた。ポルトガル人はこのことを知っているが、昨年及び今年日本にパーデレを派遣したので、彼等は捕らえられて殺され、或は信仰を棄てて日本の宗教を奉じた。皇帝はパーデレ及びキリシタンを嫌われるゆえ、もしパーデレらが日本に渡り、またはイスパニアやポルトガルの人に頼んで、日本に対し何か悪事を企てることを聞いた時は、日本官憲に知らせることを望む。²⁰

井上は個人的に、西洋の発明品に夢中であり、それらからすべての種類のエキゾチックな道具と薬種類を購入するのを好んだ。1641（寛永十八）年10月2日に、従者を連れてルメールの家を訪れる。そのとき井上は好奇心でいっぱいの様子を見せ、「オランダ家具を珍しがり、手を触れ特に炉を称讃した」。彼がよくオランダ商人に買い求めるものは遠眼鏡、鼻眼鏡、各種の薬種などであった。

1647（正保四）年1月2日付の「ウイルレム・フェルスターヘン日記」では、井上について「筑後殿は老人であるが、諸人の世話をし、自分は進物を受けず、我らの届けた物に対しては必ず代償を払うのである」と評価している。

しかし、これは彼がオランダ人との交友を必要とした主な理由ではない。ライデン大学教授レオナルド・ブリュッセイの研究²¹によると、井上が「オランダ人を海外事象にたいする自分の目と耳として必要としたのである。オランダ人への関心が、主として安全保障に関することを聞くためであった」と指摘している。

井上がどのような質問を発したのか。1641（寛永十八）年10月24日付のルメールの日記には、井上が台湾のこととキールン出征のことについて尋ね、地図を示すことを求めた。当時オランダは台湾の北端にあるスペインの要塞「淡水」と「基隆」（キールン）を攻略しようとしていたが、

井上がもし今年キールン攻撃に失敗しても、明年再び攻め、占領するまでは攻撃を継続せよと述べ、「日本の隣人としてはイスパニア人よりもオランダ人を好むからと言った」。ルメールは1641年10月28日に井上に別れを告げたが、その時井上は、今後、オランダはアジアにおけるポルトガルやイスパニアの動向を将軍に報告しなければならないと告げる。それ以来、毎年「風説書」を提出することがオランダの習慣になったのである。

また、1642（寛永十九）年、オランダ政府はポルトガルとの間に10年間の休戦協定を結んでいた。さらにそのすこし前に、ポルトガルはスペイン王国から独立を果たしていた。この休戦協定は幕府にとって大きな衝撃である。幕府がオランダ人の滞在を許可してきたのは、オランダ人がポルトガルの大敵であったからにほかならなかったことによる。1642年9月15日に、井上がポルトガルとの休戦について通詞猪股傳兵衛を遣わし、エルセラックに尋ねている。エルセラックはこの休戦が単にイスパニアの勢力を減らし、オランダの利益を収めようと期待したからであると説明した。9月17日付の同日記に、役人はポルトガル宣教師を拷問し、ポルトガルとイスパニアとの交戦状況及びオランダがポルトガルを援助する目的について尋ね、宣教師の返答はエルセラックと一致しているという記事がある。

このように、井上筑後守は欧州の諸国事情及び外交関係について関心を持っていた。よく質問し、同じ質問を何度も別の機会にしている習慣がある。それは内容に相違がないかを確認するためだったであろう。

1647（正保四）年1月9日付の「フェルスターヘン日記」に、商館長フェルスターヘンは井上筑後守との問答について次のように記している。

問 オランダ人は今ポルトガル人の敵であるか、友人であるか。

答 国は友である。

問 エルセラックは我らは仇敵であると言った。

答 両国民は平和を破ったが、政府当局はこれを続けることを命じ、五年間延長することになった。（略）

問 平和は何の役に立つか。

答 ポルトガルは小国であるから、イスパニア及びオランダと戦えば、自国の存立が不可能となる。我らは平和のおかげでイスパニアの城寨を多く占領した。平和は彼らに対する愛情に基づいたものではない。

問 フランスとは友であるか敵であるか。

答 友である。²²

（後略）

また1月15日に、オランダ人に西葡英諸国人に対する情報の収集を求めた。上述のように、井上はオランダ人を通して海外情報を収集し、鎖国下の日本と世界との繋がりを保っている。

『沈黙』第Ⅶ章には、井上筑後守はイスパニア、ポルトガル、オランダ、イギリスと日本の関係を平戸の城主松浦隆信と四人の妻のことに喩え、「それぞれ名のる女たちが、日本と申す男の

耳に、夜伽のたび、互いの悪口を吹き込み」、遂に日本は、松浦隆信のように、四人の妻を追放した。これによって幕府の切支丹禁制の正当さを主張し、宣教師の勝手な理想が「醜女の深情け」であるとロドリゴに詰問した。遠藤は恐らく『オランダ商館日記』を参考にしてこの話を設定したと考えられる。特に井上の欧州諸国関係及びそれによる日本の対策などを踏まえて、作中人物の対決場面を作ったのであろう。

6. 日本の精神風土の特徴

井上筑後守は、実に変に興味深い人物である。彼はキリスト教と一緒に西洋の優れた学問技術をいろいろ持ってきて見せる伴天連たちの祖国の強大なことも推察し、下手に手荒なことをしないで、捕えた伴天連をキリスト教の本旨と、外国の事情を問い調べる具に使った。

彼はオランダ商人、ポルトガル宣教師などの外国人とよく付き合っているのも、鎖国時代の幕府の高級閣僚の中でより広い視野を持っているインテリとも言えるであろう。しかも、欧州文明を認めながら、幕府政策をしっかり守っている二重人格のような複雑な性格を持つ人物でもある。彼は鎖国時代の日本において、幕府と外国人との交流を果たした架け橋役でもあり、また、幕府に海外情報を報告し、それに応じる幕府の対外政策をアドバイスした人物であった。

さて、遠藤は『沈黙』の主要な作中人物、井上筑後守に何を語らせるのか。井上筑後守は「切支丹とよぶ樹は異国においては葉も茂り花も咲こうが、我が日本国では葉は萎え、つばみ一つつけない。土の違い、水の違いをパードレは考えたことはあるまい」と言い、そして更に「パードレは決して余に負けたのではない」、「この日本と申す泥沼に敗れたのだ」とも言った。これらの言葉は、そのまま遠藤の言葉でもあるであろう。井上筑後守が指摘する「土の違い、水の違い」は日本の精神風土を指しているのだが、この精神風土とキリスト教との問題こそ、遠藤の主要な文学主題であった。『神々と神と』から『沈黙』に至る二十年間の遠藤の文学活動の中心は、日本の精神風土とキリスト教との間に横たわる距離を描くことに置かれていた。遠藤はこの日本人とキリスト教との距離という長く重い問題について、作中で井上筑後守の言葉とし、集約的に回復させたと考えるのである。

注：

- 1、『沈黙』遠藤周作（新潮社 1966年3月30日）
- 2、「フェレイラ、そして沢野忠庵——『沈黙』論の前提として（一）」
下野孝文『語文研究』第94号（九州大学国語国文学会 2002年12月）
「キャラ、そして岡本三右衛門——『沈黙』論の前提として（二）」
下野孝文『語文研究』第95号（九州大学国語国文学会 2003年6月）
- 3、『寛政重修諸家譜』（群書類従完成会 1964年—1966年）
- 4、『国史大辞典』（吉川弘文館 1985年9月）
- 5、『日本歴史大辞典』（河出書房 1968年）
- 6、『平戸オランダ商館の日記』永積洋子訳（岩波書店 1969—1970年）
- 7、『長崎オランダ商館の日記』村上直次郎訳（岩波書店 1958年8月）
- 8、『契利斯督記』『続々群書類従 宗教部十二』に収録（図書刊行会 1970年）
- 9、『キリシタン大名』ミカエル・ジュタイシェン著 吉田小五郎訳（乾元社 1953年5月）
- 10—11、同注9

- 12、同注3
- 13、『南蛮のパテレン——東西交渉史の問題をさぐる』松田毅一（日本放送出版協会 1970年7月20日）
- 14、同注8
- 15、『キリシタン時代の日本人司祭』H・チースリック著（教文館 2004年12月）
- 16、東京都小日向の切支丹坂の立て札による
- 17、1638年5月19日付「ニコラス・クーケバッケルの日記」
——『平戸オランダ商館日記』永積洋子訳（岩波書店 1969—1970年）
- 18、『平戸オランダ商館の日記』第四輯 P420 永積洋子訳（岩波書店 1969—1970年）
- 19、『平戸オランダ商館の日記』第四輯 P431 永積洋子訳（岩波書店 1969—1970年）
- 20、『長崎オランダ商館の日記』第一輯 P301 村上直次郎訳（岩波書店 1958年8月）
- 21、「大目付、井上筑後守政重とオランダとの関係について」レオナルド・ブリュッセイ
（2006年10月29日『長崎歴史文化博物館開館一周年記念シンポジウム』レジメ）
- 22、『長崎オランダ商館日記』第二輯 P143 村上直次郎訳（岩波書店 1958年8月）

参考文献：

- 1、『遠藤周作〈沈黙〉草稿翻刻』藤田尚子（長崎文献社 2004年3月）
- 2、『沈黙』遠藤周作（新潮社 1966年3月30日）
- 3、『遠藤周作〈沈黙〉作品論集』石内徹（クレス出版 2002年6月）
- 4、『寛政重修諸家譜』（群書類従完成会 1964年—1966年）
- 5、『国史大辞典』（吉川弘文館 1985年9月）
- 6、『日本歴史大辞典』（河出書房 1968年）
- 7、『契利斯督記』『続々群書類従 宗教部十二』に収録（図書刊行会 1970年）
- 8、『平戸オランダ商館の日記』永積洋子訳（岩波書店 1969—1970年）
- 9、『長崎オランダ商館の日記』村上直次郎訳（岩波書店 1958年8月）
- 10、『キリシタン大名』ミカエル・ジュタイシェン著 吉田小五郎訳（乾元社 1953年5月）
- 11、『キリシタン時代の日本人司祭』H・チースリック著（教文館 2004年12月）